

令和6年度 自己評価書				
学校名		和歌山市立 貴志南小学校		
校長氏名		萬田 雅彦		
作成日		令和 7年 3月 3日		
1	教育目標			
望ましい人間像をめざし、一人ひとりの子供の主体性・創造性を養い、心身ともに健康で、豊かな人間性や社会性のある子供の育成をめざす。 — たくましい子 ・やさしい子 ・考える子 —				
2	本年度の取組についての評価			
	基礎学力の定着	豊かな心の育成	健やかな体の育成	開かれた学校
指標	・全国学力・学習状況調査等の無回答率の改善【20%以下】 ・「学校での勉強がわかる」【児童80%】	・いじめの解消率【児童100%】 ・命の大切さや社会の決まりについて教えてもらっている【児童85%】	・朝ごはんを食べた【児童95%】 ・積極的に運動を行うように計画し、実施する【教師100%】	・学校の様子がよく伝わった【保護者90%】 ・学年に応じた地域学習を1回以上行う【教師100%】
重点目標【P】	◎基礎・基本の定着 ◎家庭学習の定着 ◎主体的に取り組む	◎道徳教育の充実 ◎いじめの未然防止、早期発見 ◎友達を大切にする	◎健康な生活 ◎基礎体力の増強 ◎危機回避能力の育成	◎家庭・地域との連携充実 ◎保幼小の接続、中学校区における連携の推進 ◎地域の資源の活用
取組の状況【D】	・放課後等の補充学習の実施 ・取り出しによる個に応じた指導。 ・和歌山大学教育ボランティアの受け入れと活用。 ・ノート指導の共通理解。 ・読書時間の確保。 ・自分の言葉で表現する時間の確保。	・気になる児童の把握と対応のために、「南の子」において、児童の様子の共通理解を図る。 ・あいさつ、整頓の励行。 ・特別支援学校等の講師を招待しての出前授業を実施。 ・道徳・人権の授業は公開できた。	・手洗い、うがい、換気の継続をすると共に、規則正しい生活を送り健康を保つ。 ・早寝、早起き、朝ごはんを、適度な運動に取り組み、抵抗力をつける。 ・休み時間の外遊びの推奨。 ・アレルギーや心肺蘇生法についての職員研修の実施。	・各種便りやHPを通して学校の情報を発信する。 ・幼保小の交流や、中学区での連携を充実させる（特別支援学級の交流、中学校見学）。 ・地域人材の活用（ゲストティーチャー、体験活動）
取組の成果と課題（評価）【C】	・個別の指導では大きな成果があるが、教員数の関係が必要最低限の時間数での実施であり、できればもう少し充実させたい。 ・研究授業は全学年実施出来た。 ・ノート指導は、全学年で共通理解をし、同じスタンスで取り組むことができた。 ・全国学力・学習状況調査の国語の無回答率が全国平均の3倍【36.6%】であり、対策が必須である。 ・「わたしは学校での勉強がわかる」【83%】	・いじめアンケートにより、児童の実態把握に務め対応できた。いじめ解消率100%。 ・「わたしは学校が楽しい」【児童90%】 ・「命の大切さや社会のきまりについて教えてもらっている」【児童94%】 ・道徳・人権の授業公開できた。	・大休憩や昼休憩に、外に出て遊ぶ子供は増えている。 ・複数の学年が一緒になって、運動場で体を動かす機会を持てた。 ・バスケットボールは増やしたが、ゴールが2つだけなので、対策を考えたい。 ・朝ごはんを毎日食べる子供は86%であった。	・HPの閲覧数は、約4000であり、目標には遠く及ばなかった。学校の情報や児童の取組の様子などをもっと見てもらえるよう工夫が必要である。 ・地元の農家の方に指導していただき、田植え・稲刈り体験は実施できた。
改善方法【A】	・子供たちが主体的に学習に取り組めるよう、教員の授業力を高めていく。 ・すべての児童のために学習環境や授業のユニバーサル化を図る。 ・無回答率を改善するために、その原因と対応を把握し、共通理解を図る。 ・学用品の統一については一定の効果があつたので、引き続き取り組んでいく。	・道徳授業の充実を図るとともに、特別活動や総合的な学習の時間などの体験を通じて実践力を養う。評価についても引き続き研究していく。 ・いじめ防止基本方針について、適宜見直し。迅速に対応できるよう教職員で共通理解を図る。	・食育を通して、給食を完食することの意義を伝え、抵抗力のあるからだ作りに取り組む。 ・地震が起こった際には、反射的に身の安全を確保できる児童が増えてきたが、地震だけでなく、大雨等の悪天候についても取り組む必要がある。	・学校の様子をもっと頻繁に発信していく。 ・地域素材を教材化し開発するように努める。 ・コミュニティスクールや共育をもっと活用し、地域との関わりを増やしていく。
3	その他の課題			
・全国学力・学習状況調査の結果で、全国平均との差が国語－6ポイント、算数－3ポイントであり、基礎学力の向上が必須である。 ・基礎学力をつけるために、個別の指導に取り組み効果を感じているが、指導する人員の確保が困難であり、工夫が必要である。 ・タブレット端末を使った授業に全学年で取り組んでいるが、学年による統一した取り組みについて検討する必要がある。 ・学校行事に関して地域との連携した取り組みはできているが、もっと学年の授業で、定期的に地域の人材を活用した取り組みができれば、子供たちだけでなく、教員にも非常にメリットがある。				